

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00772

研究課題名（和文）小学生の持続可能な家庭学習法：低学年から英語を導入する小学校児童と保護者への調査

研究課題名（英文）Sustainable Home Studying Method for Elementary School Students: A Survey for Parents and Elementary School Children Who Attend Schools that Introduce English Classes from the 1st Grade

研究代表者

成岡 恵子（Naruoka, Keiko）

東洋大学・法学部・准教授

研究者番号：90553769

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、小学校低学年から英語の授業を導入する学校に通う児童にとって、家庭で保護者と一緒に学習できることには何があるか、そしてその家庭学習が、保護者および児童の英語への関心や学習意欲を育むことになるのかを調査した。被験者ペアに、1）フォニックス学習、2）英語絵本の読み聞かせ、3）簡単な英会話、を6か月間取り組んでもらった。その結果、フォニックス学習や読み聞かせは、保護者と児童の英語への関心や学習意欲に大きく影響を与えることが分かった。一方、英会話を家庭で実践することの難しさが明らかになった。調査結果を外国語不安（language anxiety）および習慣化と内的動機付けの関係から考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの小学校英語教育に関する研究では、家庭学習についての議論は見られず、特に児童が学校でつまずいたり、英語に苦手意識を持ったりしたときに、保護者が家庭で何ができるか、といった家庭学習に注目した研究は行われていない。

学校の授業についていくことができず、「英語嫌い」になってしまった児童が、家庭で保護者と一緒に英語を学習するといった不安の少ない環境で、さらに学習を習慣化することができれば、児童の「関係性」や「有能性」といった内的動機付けが高まり、英語に対する不安が軽減され、モチベーションが増加していくことを示した。

研究成果の概要（英文）：This study explores the methods of English home studying for lower-grade students of elementary schools. It investigates whether these methods of home studying can have a positive impact on the students' and parents' interest in English learning. The survey asks the subject pairs (parent and child) to work on the following methods for the duration of six months: 1) learning phonics, 2) storytelling (using English picture books), and 3) having simple English conversations with each other. The results show that studying phonics and reading English picture books everyday help subjects have more interest in English and motivate them to learn more. Methods 1) and 2) are easier to make daily habits. On the other hand, 3) is difficult to conduct every day, mainly because of students' and parents' anxiety about speaking English. The survey results are further examined from the perspective of "language anxiety" and "intrinsic motivation."

研究分野：言語学

キーワード：小学校英語教育 家庭学習 フォニックス 読み聞かせ

1. 研究開始当初の背景

2020年に、公立小学校3年生からの英語必修化、5, 6年生の英語教科化が始まった。小学校英語教育の分野では、授業方法、教材開発や教員養成など、さまざまな研究が行われ、多くの図書が出版されている。その一方で、小学校低学年から英語に力を入れ、授業を毎週複数回実施している小学校に通う児童やその保護者の抱える問題に関しては、全くと言ってよいほど研究が行われていない。低学年から英語の授業を実施する小学校の中には、英語ネイティブスピーカーの教員が授業を担当する、日本人教員であってもすべて英語で授業運営を行う、といったこともめずらしくない。そのような場合、授業中に先生が何を言っているのか分からない、という児童も出てきており、学校以外での英語学習が必要とされる場合さえ生じている。幼児の頃から英語教室に通う子どもや、インターナショナル幼稚園や保育園に通っていた子どもがいる一方、小学校に入るまでほとんど英語に触れたことのない児童もいるため、教室での子どもたちの理解度に差が出ている（勝山他 2006）。このような問題は英語に限ったことではないが、国語や算数といった教科では、子どもがつまずいた場合、家庭で保護者がアドバイスしたり教えたりすることが、日常的に行われている。また、小学校低学年の場合、学習習慣を身に着けるためにも、親が宿題を見ることが奨励され、国語や算数に関しては親が児童の学習に関わることも多い。それに対し、英語では、国語や算数のような家庭学習が行われていない場合が多いと考えられる。親自身が小学校で英語を習った経験がない場合も多く、何をどのように教えればいいのか分からない、またネイティブではない発音で教えるのはよくないのではないかと、家庭学習が積極的に行われない現状もある。小学校での英語教育という大きな変化に対し、学校や教員側だけでなく、保護者の戸惑いや不安も大きい（牧野2008）。一般図書を見ると、英語で子育てをする際に使用できる表現集などが出版されている。教材としても、英語のドリルやフラッシュカード、英語の絵本やCD、DVDなどは多く手に入る。ただし、それらを小学生の家庭学習にどのように用いれば良いのかというガイドとなるものは見当たらない。

小学生にとって親子関係と学習への動機づけは密接な問題であり、親が家庭で子どもの勉強を見てあげると、子の学業成績に肯定的な影響があるという報告がある（Ryan, Stiller, and Lynch 1994）。また、小学校低・中学年にとっては、親と一緒に勉強をすることが肯定感を得ながら続けることができるとされている（竹村・小林 2008）。

このことから、英語を、国語や算数と同じように、保護者の協力の元、家庭学習として習慣づけることは大切であり、小学生にどのような英語家庭学習が適切であるかを調査することが重要であると考えた。小学校高学年で英語が教科化されるにあたり、小学生の英語の家庭学習についてもっと焦点が当てられるべきであり、保護者と一緒に家庭でできる学習方法や教材についての研究が急務であると思われた。

2. 研究の目的

本研究は、小学校低学年児童が家庭で保護者と一緒に取り組む英語学習にはどのようなものが適するのか、英語を家庭で学習することで、児童や保護者の英語に対する意識はどのように変化するかを明らかにするための調査を実施した。英語の授業が低学年から導入されている小学校に通う児童とその保護者に協力を得て、どのような家庭学習をすることで、小学校で行われている英語の授業に子どもが戸惑うことなく、英語を身近なものに感じつつ、学習の習慣が付くかを調査した。

3. 研究の方法

被験者児童とその保護者に行ってもらった学習内容は、(1)フォニックス教材を使った学習をすること、(2)英語絵本の読み聞かせを行うこと、および(3)あいさつ、数字、曜日などの簡単な英語表現や英語の質問を日常の会話で使うこと、の3つである。これらの学習方法について保護者に事前に説明をし、それを6カ月間、可能な限り毎日実施してもらった。フォニックスは、市販の音源付きテキストを渡し、各自のペースで進めてもらった。読み聞かせは英語絵本を開始時に20冊ほど、その後数カ月ごとに追加で渡した。絵本にはCDなど音源が付いているものに加え、音源が付属していない本にはネイティブスピーカーが読み上げた音源を渡した。保護者には、1)一週間で実施した内容、2)児童の反応、3)保護者の感想、をレポートに書いて毎週提出してもらい、レポートに対するフィードバックを研究者から被験者保護者に戻した。フィードバックの内容は被験者からの質問(フォニックスの進め方や、読み聞かせの方法など)に対する回答や、英会話の取り入れ方のアドバイス、そして学習に対する励ましなどが含まれる。さらに、6カ月のプロジェクト終了後には、3つそれぞれの実施項目についての感想や、被験者児童および保護者の意識の変化に関することなどのアンケートに答えてもらった。

本研究における仮説は、上記の(1)~(3)を家庭学習として取り入れることにより、調査期間終了時に次のような結果が見られることである： 児童が英語をより身近に感じるようになる、児童が英語に対して得意意識を持つようになる、児童が毎日英語に触れる習慣がつく、保護者が児童の英語学習に積極的に関わるようになる。以上4点が達成されることにより、英語家庭学習がより持続可能なものになると予測した。

本調査では、2019年度に3組、2020年度に1組、2021年度に3組の計7組に参加してもらった。全員が東京都内の、小学校1年生から英語の授業が週3回ある私立小学校に通っていた。被験者7名の内、被験者Gのみ、調査途中で辞退した。6カ月の調査終了後、被験者(A~F)保護者にアンケートの回答を依頼し、6カ月間参加した全ての保護者から提出があった。

4. 研究成果

4.1. フォニックス学習

フォニックス学習に関しては、保護者からの反響が非常に大きかった。保護者自身が学んだ英語とは異なる学習法であったため、驚いたと同時に、被験者児童たちが6カ月間で3文字語が抵抗なく読めるようになったことに「目から鱗だった」というコメントさえ聞かれた。松香(2008)が述べるように、フォニックスはやる気になれば短期間で学べて効果がある、ということを実感した。また、フォニックスで英語を少し読めるようになったことから、日常で目にする看板などの英単語を自ら読もうとする姿が見られるなど、自律的な学習のきっかけとなることも分かった。当初は被験者保護者に馴染みのないフォニックスという学習法が受け入れられるのかという思いもあった。しかしながら、市販のフォニックス教材を用い、文字と音の仕組みを親子で学ぶという学習法は、特に保護者には好意的に受け取られた。

4.2. 英語絵本の読み聞かせ

英語絵本の読み聞かせは全体的に被験者保護者からの評価が高かった。小学校学習指導要領でも、絵本には具体的な場面設定があり、読者の理解を促す絵もあるため、「英語の読み聞かせを聞いて内容を理

解できた」という喜びや達成感を体験させる手段として適切な教材とある(文部科学省 2017)。毎日の絵本の読み聞かせをすることにより、「英語が身近に感じるようになった」「英語を聞くことに慣れてきた」という声が多かった。また、絵があるために、英語そのものが分からなくても、ストーリーが全く分からない、ということがなく、英語に親しむことを目的とする場合には適するインプット方法であると感じた。さらに、読み聞かせの評価が高かった理由として、母子の大切なコミュニケーションの時間となった面があることも付け加えたい。

4.3. 英会話

英会話に関しては、親子の間でも恥じらいがある場合が多く、フォニックス学習や絵本の読み聞かせと比べ、ほとんどの被験者が苦労していた。『はじめての親子英会話』(清水 2014)など、家庭で親子の会話に英語を取り入れることを推奨するような書籍が多く書店にも並ぶが、それらの本にある、「教えるのではなく、語りかけが大切」や、「毎日コツコツ英語で子育てをしたら子どもも英語を話すようになった」(清水:2014)ということを実践することの難しさが、今回の調査では明らかになった。

しかしながら、どの被験者保護者も、家庭で英会話を導入することの大切さは感じていたようである。テキストなど紙の上ではなく、日常の動作の中で英語を使うことで、「意味を言わなくても理解してもらえ、ということが分かった」ようであり、上手くできると、学校の授業の復習となり、繰り返し使うことで表現を習得することができることも、保護者が実感していた。

この取り組みで明らかになったことは、親子という最も親しい間柄であっても、そして小学校低学年であっても、外国語を話すことに対する「恥じらい」の気持ちや、考察で見る「外国語不安」があることである。そして、その感情は、半年続けてもなかなか払拭されないような根強いものであった。

4.4. 英語に対する意識

児童の英語に対する意識に関しては、毎日家庭で保護者と英語を学ぶことにより、以前よりも英語を身近に感じたり、好きになったり、得意意識を持つようになったと思われる児童がほとんどであった。

日常生活の中で目にする英単語を読もうとしたり、通りすがりの外国人の英語に耳を傾けるようになったというコメントも見られ、英語への関心が高まったことも分かった。

保護者の意識の変化はさらに大きいものであった。子どもと一緒に学びたいと思うようになったり、子どもにどのような英語を学んでほしいか、どのように英語と向き合って欲しいかまで考えるようになった被験者もいた。

4.5. 英語学習の習慣化

上手に英語学習を習慣化することが出来ると、徐々に分かることが増え、好きになった(もしくは嫌いではなくなった)という良い連鎖を、多くの保護者が経験することができたようである。毎日英語に触れることで、英語がそばにあり、英語に対する「特別感」がなくなり、漢字や計算の宿題のように毎日英語を勉強することが当たり前になったというようなコメントが多く聞かれた。また、毎日少しでも英語に触れる時間を作ることで、モチベーションも継続された、というように習慣化とモチベーションの関連についても指摘があった。

上記の分析結果を基に、小学校低学年児童が英語を学ぶ際の、児童の外国語不安 (language anxiety) および、モチベーション (動機) について考察した。本調査以前には、被験者児童の「英語に対する苦手意識」や「英語嫌い」などといった、英語に対する外国語不安が見られた。Horwitz, Horwitz, and Cope (1986)の研究にあるように、外国語不安は「話す活動」や「聞く活動」に顕著に見られる。特に「話す活動」が不安になる要因としては、人前で話すことで恥をかいてしまうのではないかと、発音が悪いと思われるのではないかと、上手に伝わらないのではないかと、等が挙げられ、特にクラスメートの前で話すことが最も不安をかき立てる (Prince 1991)。小学校の英語の授業は、「話す活動」が中心となっており行われる場合が多く、まさにこのような不安を児童が感じていると考えられるため、小学校低学年であっても児童が「苦手意識」を持ったり「英語嫌い」となってしまう恐れがあることが予想できる。本調査で被験者に取り組んでもらった英会話が、ほかの2種類に比べ、上手く効果を発揮しなかったことも「話す活動」であることが関係していると考えられる。

それに対し、「読む活動」や「書く活動」は、処理のために時間的な余裕があること、また「話す・聞く」と異なりすぐに反応しなければならないわけではないことから、不安が少ないとされている (八島 2019 : 68)。小学生児童の持つ外国語不安から英語学習法を考えてみると、クラスメートの前ではなく、親と二人、という安心できる場で、さらにフォニックス学習といった読むことに重点を置いた学習法で家庭学習をすることにより、外国語不安が軽減され、英語に対する苦手意識や、「嫌い」といった感情が、解消されていくと考えられる。

また、学習に関しては「内発的動機付け」(intrinsic motivation) を持たせることが望ましいと従来から言われており、その内発的動機付けについて、Deci and Ryan (1985) や Ryan and Deci (2000) は学習に関する内発的動機を高めていくために「自律性」「有能性」「関係性」の3つの心理的欲求が満たされることが必要であるとしている。今回の調査では、親と一緒に勉強してくれるという「関係性」や、英語が理解できる、分かる、という「有能性」が児童の英語に対するモチベーションに深く関係してきていると思われた。親と一緒に勉強することで、毎日親からの褒め言葉や励ましの言葉がかけられていたと考えられる。また「母子の大切な時間であった」と被験者保護者が述べるのと同様、子どもにとっても同じく大切な時間と考えられていたであろう。「関係性」が土台となり、子どもにとって英語学習が好意的に捉えられたことを示している。

「有能性」に関しては、児童が毎日少しずつフォニックスを学ぶことで、アルファベットに親しみ、英語を読める、ということを実感できるようになり、絵本の読み聞かせを続けることで、絵の助けもありストーリーを理解することが出来る経験を積み重ねることが出来た。このような経験から「英語が読める」「英語が聞いて理解できる」という意識が高まっていったと考えられる。さらに、「有能性」が満たされたことで、「英語をもっと勉強したいという意欲が出た」、「自ら前向きに英語学習に取り組むことができるようになった」、という被験者のコメントにつながったと考えられ、低学年ながら、学びに対する「自律性」までも見て取れた。

以上のように、家庭学習では、児童の外国語不安を軽減できるような環境と取り組み内容によって、児童が内発的動機付けを持つことができ、英語学習に対する意欲が高まることを考察した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------